

## 地域計画特論(7) 無意識の心理(ユング心理学基礎)

2005. 06. 09. 作成  
2012. 06. 24. 修正

### ■精神分析学

#### ■タイプ

#### ■コンプレックス

#### ■個人的無意識・集合的無意識

#### ■影・自己

#### ■元型



## ■精神分析学

フロイト(Freud, S. 1856-1939)

アドラー(Adler, A. 1870-1937)

ユング(Jung, C. G. 1875-1961)

外国ではフロイトの学説を精神分析(Psychoanalysis)とよぶ。  
わが国では、アドラーやユングを含める場合が多い。

アドラー…「個人心理学」(Individual Psychology)

ユング…「分析心理学」(Analytical Psychology)

ネオフロイト派の考えも含めて総称するとき:

「深層心理学」(depth psychology)

…>人間の行動の理解のために「無意識」(unconsciousness)  
の概念を使用する。

## ■精神分析学

フロイト(1856~1939)

人間の行動の根底には無意識の衝動が潜んでいるとする

エス(イド)

超自我

自我  
(現実への適応)

ユング(1875~1961)

無意識は個人の過去のみでなく、民族、人類、霊長類としての  
原始体験が蓄積されたもの

### ■集合的無意識層

宗教や神話の内に象徴的に表現されている



## ■タイプ

フロイト、アドラーとの相違を事象に対する基本的態度の相違  
であると考え、異なるタイプについて記述しようとした。

個人の意識的態度…無意識の補償作用(compensation)  
自己(self)の考えを内蔵している。

内向(introvert)・外向(extravert)

新しい場面に入るときの行動によって、両者の相違が特徴的にでてくる。

「外向型の人」:つねに適当に行動できる、適当に話しかけ、適当にだまり、  
前からずっといたかのように全体にとけこんでふるまう。

「内向型の人」:ぎこちない感じがつきまとう、当惑を感じ、「こんなことを  
いっては笑われるかも」「こんなときはにぎやかにしなければならぬ」など  
の考えにとらわれる。⇒慣れにしがたがって、徐々に能力を示し、他を驚か  
すような深さを示す。

## ■タイプ

外向的なひと	内向的なひと
<ul style="list-style-type: none"> <li>・子供のときに得をする。先生や大人たちの考えを感じて行動し、不安を感じないで新しい場面に積極的に働きかけてゆく。</li> <li>・外向性がきついと外界への興味の度がすぎて、危険や動きすぎ</li> <li>・一般的に社交的で、多くのことに興味を持ち、交友関係も広い</li> <li>・適当に自信をもって行動しているが、ときどき外的障害につまづく</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・幼稚園・小学校低学年で困難を感じる人が多い。</li> <li>・友人をつくりにくく、先生にもなじみにくい。才能を持っていても、伸び伸びとだすことができない。</li> <li>・先生や親の心配の種になるが、特に心配すべきことではない。</li> <li>・過度に自己批判的で、自信なさそうに見えるが、いったん思い込むと、少々の障害にはたじろがない。</li> </ul>

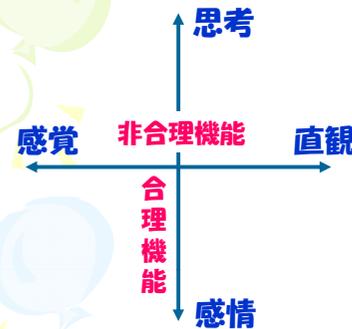
西洋では「外向的態度」を好む、社交性に富む、適応がよいなど肯定的であるが、「内向的態度」は自己中心的、病的であるとされる。

意識・無意識の補償性

意識の態度が外向的・・・無意識の態度は内向  
意識の態度が内向的・・・無意識の態度は外向

無意識の態度は補償的に働く

## ■四種の心理機能



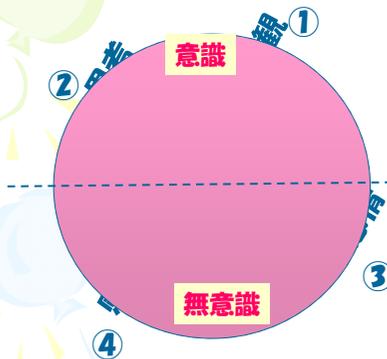
一般的態度とは別に各個人の最も得意とする心理機能をもつと考えた。

- |                   |                |
|-------------------|----------------|
| 1) 思考 (thinking)  | } 自分のなかにとどめる機能 |
| 2) 感情 (feeling)   |                |
| 3) 感覚 (sensation) | } 何らかの判断をくだす機能 |
| 4) 直観 (intuition) |                |

「一般的態度」と「心理機能」で8種類の類型を考えることができる

- 思考: 対象が何であるか対象同士がどんな関連があるかを判断する機能
- 感情: 対象が好ましいかどうかを判断する機能
- 直観: 対象のかくれた意味、可能性を発見する機能
- 感覚: 対象のさまざまな現象を映しとる機能

## ■意識と無意識の相補性



このようなひとは「思考的直観型」自分と型の異なるひとを理解することはできない。  
思考型 ⇔ 感情型  
感覚型 ⇔ 直観型

意識の態度に注目することによって、タイプ分けを明確化し意識と無意識の相補作用の存在を指摘した。

問題はこの未発達な抑圧された側面が、そのままおさまってくれないことたとえば、「思考型」の人が一生論理的・理論的判断を使うことだけでうまくやっているとわけていけないうわけにはいかない。  
合理的思考で解決しない問題にとりつかれると、抑圧された対極の感情機能の補償が生じる。(感情型の人の場合は思考機能の補償が生じる)

## ■コンプレックス

多くの心的内容が同一の感情によって、ひとつのまとまりをかたちづくり、これに関係する外的な刺激が与えられると、その心的内容の一群が意識の制御をこえて活動する。

言語連想実験をしたときに、われわれの連想を妨害するもの、意識の制御のおよばぬ心的過程の存在がみとめられる

無意識内に存在して、何らかの感情によって結ばれている心的内容の集まりを「コンプレックス」と名づけた。  
感情によって色づけられた複合体 (feeling-toned complex)

コンプレックスは、つねに抑圧された心的外傷という否定的なものではなく、(フロイトの場合は、無意識の心的内容は抑圧されたもので、性的な欲望と関連が深いと考えた)、無意識の内容はそれのみでなく、その背後にもっと深い元型的なものを認めていこうとした。

## ■コンプレックスの現象

コンプレックスは自我の統合性を乱し、障害を生じる。  
自我にとって容易に受け入れがたいものであり、気がつかない  
(ようにしている)。

- 1) 同一視 (identification):  
コンプレックスと自我が同一視され、自我はコンプレックスの影響下におかれる
- 2) 反動形成 (reaction formation):  
自我によって受け入れがたい欲求と逆のことをして、自我の安定を保つ
- 3) 投影 (projection):  
自分の内部のコンプレックスを認知することを避け、外部の何かに転嫁して  
外的なものとして認知する
- 4) 代償 (compensation):  
コンプレックスに基づく欲求を自我が受け入れ難いとき、本来の対象と異なる  
ものを代償としてえらぶ

## ■ノイローゼ

ノイローゼ (神経症)  
「心によって起こる心の病気」・・・心理的原因のために心理的  
機能や、身体的機能に比較的永続的な障害が生じていること  
(コンプレックスが自我に影響を及ぼし、神経症症状となって、  
出現している場合)

本人がそれを病的な症状であるとして認め、不可解であると思  
いつつもどうしても意識的に治すことができない。

ノイローゼがコンプレックスにより生じるもので、コンプレックス  
の存在を意識化することによって治療できることを示した(フ  
ロイト)

ユングは、ノイローゼの「症状の分類」より「治療」に重点をおき、  
その際における治療者と患者の人間関係を重視し、それを明らか  
にした。

## ■コンプレックスの解消

内向的な日本人の陥りやすい「自分の内部をみつめて」、自分の  
欠点について検討したり反省したり、苦行をしなければならない  
・・・ということでは、コンプレックスは解消されない。

むしろ「コンプレックスを生きてみて、それを統合していく努力」  
をするほうがよいと思われる。

コンプレックス解消への努力の道程:  
コンプレックス自体、つねに否定されるべきものではなく、努力によって自我の  
なかに統合されるときは、むしろ建設的な意味を持つものとなる。  
コンプレックスは自我にとっては否定されるべきものと映り、破壊的な攻撃性と  
受け取られるのであるが、それが自我のなかに統合された場合は、むしろ望ま  
しい「活動性」としてみられることも多い。

## ■個人的無意識と普遍的無意識

無意識を層に分けて考え、個人的無意識  
(personal unconscious)と普遍的  
無意識 (collective unconscious)  
とに区別する。



ユングの心理学の特徴をなすものであり、普遍的  
無意識の概念は芸術家、宗教家、歴史学者など  
に歓迎されるが、一方多くの誤解を生じさせること  
となった。

たとえば、「生命がうまれてくる」「産み出すもの」としての母、土、(何かを  
蔵している)深さなどは一体として感じられ、地母神としてのイメージとして  
全世界いたるところで見出すことができる

母なるもののイメージ(全人類共通) ⇔ 大母 (great mother)

個人的な実際の母親像とは区別する

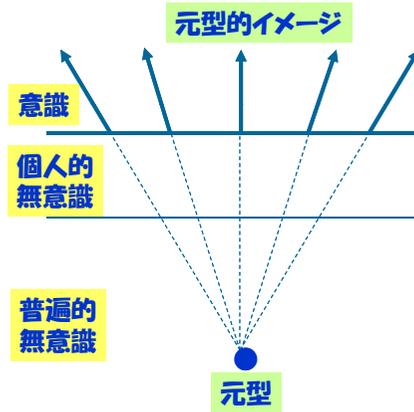
## ■普遍的無意識と元型

- (1)意識
- (2)個人的無意識・・・意識が抑圧した内容、心の感覚的な痕跡
- (3)普遍的無意識・・・人類・動物に普遍的で、心の真の基礎

神話、おとぎ話、夢、精神病者の妄想、未開人の心性などに共通

「元型」: 普遍的無意識の内容の表現に共通する型

「元型」は、明確な概念規定によって把握できるものではなく、あくまで隠喩によってのみその意味を知ることができる。



## ■神話と元型



「元型とは本能行動の様式である」  
古代のひとが、外部の現象のみでなく、心の内部に与えた動きも述べようとしたもの

東アフリカのエルゴン山の住民(日の出に太陽を崇拝する)

「太陽は神様なのか」  
「太陽がここにあるときは神様ではないというが、東の空にあるときは、あなたたちは、太陽という」  
「頭上にある太陽が神様でないことは確かだ。しかし太陽が昇るとき、それが神様だ」

太陽が昇る現象と心のなかにひき起こされる感動は不可分であり、それが「神として体験」される⇨「元型的体験」

神という元型そのものは意識化できないが、「太陽が昇る」という表現は可能であり、主体と客体の不可思議な一体化が生じる  
⇨「神秘的関与」(participation mystique)

## ■元型の意味

世界中の神話やおとぎ話などに、共通する男性像、女性像が見出され、このような全人類に共通するモチーフをユングは「元型」とよんだ。

元型とは人間が生来もっている「行動の様式」(pattern of Behavior)というべきである。昇る太陽をみたとき「神」として把握しようとする様式が心の内部に存在していると考え

元型は、意識によってとらえることはできず、意識の与える効果のみ認識される(原始心像)。元型は隠喩(metaphor)によってのみその姿を示す。

⇒隠喩をよみとることのできないひとにとっては、元型は合理的な理解を超えた深い謎である。(現象学的接近法を身につけないとわからない)

## ■影(その1)

ユングが元型としてとりあげたもので代表的なもの:  
ペルソナ(persona)、影(shadow)、アニマ(anima)、アニムス(animus)、自己(self)、大母(great mother)、老賢者(wise old man)

「影」: その個人の意識によって、生きられなかった反面、その個人が容認しがたいとしている心的内容(人格の側面)。

「夢分析」の初期に顕になることが多い。一般的には「その人が何となく苦手な、何となく毛嫌いしたり、敬遠したくなるような人物というのが「影」であることが多い。

影の自律性が高まって、自我の制御を超え、突発的な行動として外に現れる。最も劇的な形で現れるのが二重人格の現象。自我との交流が断たれると、だんだん強力になり、それ自身が人格となり自我に反逆する。

## ■影(その2)

文学作品として「影」が描かれている。「ジキル博士とハイド氏」(自我と影がときどき入れ代わって、外見は同一人物として、行動する)

われわれが普通に考えても、酒によったときとか、勤務を終えて家に帰ったときとか、われわれの自我の制御力が弱まるときに普段の性格とは逆の性格が現れる例を容易に認めることができる

影の問題は生きていく上において、確かに厄介なものであるが、厄介なものであるだけに、これを他人に負わすことなく、自分で責任を取って生きていくのが本当の生き方であろうと思われる。

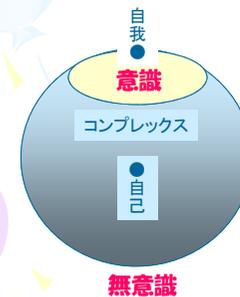
一つの国民(民族)が、全体としての影を何ものかに投影するような現象も全世界にしばしば見られる。(最近の某国における日本の批判??)

影の場合も普遍性の強いものを「普遍的影」(collective shadow)という

## ■自己

われわれの意識も自我(ego)を中心として、ある程度の安定性を持ち、統合性をもっている。一個の人格として認められる。  
⇒安定した状態にとどまることなく、安定性を崩してさえ、より高次の統合性へと志向する傾向が人間の心のなかに認められる

意識を超えた働きの中心 ⇒ 自己(self)



自我 (Ego) 意識の統合の中心

自己 (Self) 心全体の中心

コンプレックス

自己は意識と無意識の統合の機能の中心であり、人間の心に存在する対立する要素を統合する中心

## ■いろいろな元型(その1)

元型のなかで、重要なもの:ペルソナ、影、アニマ・アニムス、太母、自己、老賢者など。

【ペルソナ】(persona)

ラテン語の仮面、われわれが外界に対してつけている仮面、すなわち、外に向かった人格の一側面。



【影】(shadow)

その人の意識によって生きられなかった半面、そのひとが認めがたいとしている人格の側面。光のあたらない、その人の暗い側面。



【アニマ・アニムス】(anima/animus)

外的人格のペルソナに対して、内的人格としての「こころ」をあらわす。アニマは男性の「こころ」をあらわす女性の姿、アニムスは女性の「こころ」をあらわす男性(複数)の姿。



## ■いろいろな元型(その2)

【太母】(great mother)

すべてのものを産み出し、あるいは呑み込むもの、生の神であると同時に死の神でもある母なるものの元型。



【老賢者】(wise old man)

ものの善悪、将来の状況、ものの表裏などあらゆることを全て知っている超人的な元型。老人の姿をとることが多いが、「自己」(self)のもっている智慧が具現化した形であられる。



- ⇒ 夢判断において、多数の元型が現れることがある。
- ⇒ 家族的無意識とか、文化圏に共通する文化的無意識などが考えられる。
- ⇒ 民話・童話・昔話などの深層心理分析に用いられる

## ■心理療法の意義

個人に内在する可能性を実現し、その自我を高次の全体性へと志向せしめる努力の過程を、個性化の過程(individuation process)あるいは自己実現(self-realization)とよび、人生の究極の目的と考えた。

……「心理療法」の目的とするところも結局このことと同じ  
ただし、自己そのものを知り尽くした到達点を示しているのではない(プロセスが重要ということ)

高次の統合性へと導く過程が心のなかに生じた際、もはや意識の中心としての自我に帰することはできない。  
意識を超えた自己の機能により、男性的なもの、女性的なもの、思考と感情など(対立するもの)が統合される

⇒精神医学的な考察は次回以降に行う。



## ■今回の参考文献

1. 河合隼雄:ユング心理学入門、培風館、1967.
2. 河合隼雄:無意識の構造、中公新書、1977.
3. 河合隼雄:コンプレックス、岩波新書、1971.
4. 山中康裕:絵本と童話のユング心理学、ちくま学術文庫、1997.
5. 鈴木晶:フロイト以降、講談社現代新書、

